

# 花き産地の育成

## ～周年菊研究会活動による担い手育成～

所 属 名：南薩地域振興局農政普及課  
発表者名：吉留 昭夫

### <活動事例の要旨>

若手生産者で組織する周年菊研究会を対象に、プロジェクト活動を支援し、得られた成果を産地へ波及する体制づくりを行った。まず、産地共通の課題である土壌のリン酸過剰に対し、リン酸を含まない新肥料を作成し、産地研修会で活動報告を行い、理解と普及が図られました。若手会員はプロジェクトに取り組むことで資質向上が図られ、担い手として育成されつつある。

## 1 計画された活動の課題・目標と策定過程

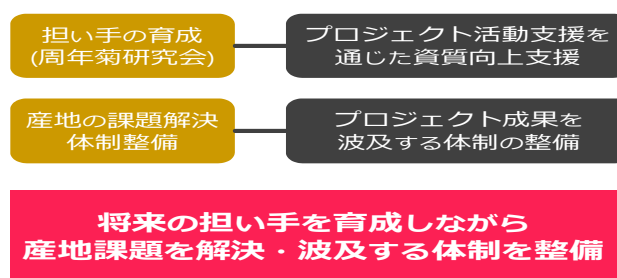
### (1) 課題・目標と設定理由

枕崎市大塚花き団地は、県内でも有数のキク産地ですが、高齢化や花き業界の低迷により、生産者数はここ15年弱で半分程度に減少してる。産地規模は維持していますが、それも限界になりつつあります。

そこで、これからの産地を担っていく若手生産者を育成することと、産地の課題解決を図る体制を整備することの2課題を取り上げ、産地の維持・発展につなげることにした。

### (2) 計画の策定過程

8名の若手生産者組織である周年菊研究会を対象に、プロジェクト活動支援を行い、プロジェクト活動を通じて得られた成果を産地へ波及する体制づくりを整備し、将来の担い手を育成しながら産地課題を解決波及することとした。



## 2 普及活動の内容

### (1) 活動の経過

#### ア 研究会活動の活性化

周年菊研究会の活動活性化に向け、会員が抱える課題を相互に検討して解決していく活動としてプロジェクトに取り組むことを提案し、会員の理解を得て、研究会活動に導入することとした。

#### イ 個別プロジェクト支援

各会員が興味を持っていることについて個別プロジェクトとして課題設定を行い、解決のための計画書を作成し、それを定例会において皆で共有しながら、実証ほ設置、調査及び成果取りまとめ等の支援を実施して、得られた実績を定例会で発表して次へつなげた。

#### ウ 個別プロジェクトからの発展

共通する課題として、長年の連作によるほ場のリン酸過剰が産地の課題となっており、リン酸を含まない配合肥料が無いことから、数種類の単肥を組み合わせる施肥設計とした場合、散布労力がかかることが明確になった。

#### エ 共同プロジェクト活動支援

JA や経済連などの関係機関と連携して、産地の土壌に適したリン酸分を含まない新肥料の商品化を研究会の共同プロジェクトとして位置づけ、サンプル肥料を作

製し、会員のは場で既存肥料との比較試験を実施した。

#### オ 活動成果の波及体制整備

会員には、調査研究の課題として、その成果を産地に波及することが重要だと意識付け、産地の研修会等で、活動成果を発表する場を設けられるよう生産者団体に働きかけた。産地研修会で共同プロジェクトの活動報告を行うことにより、プロジェクト活動に対する理解と成果波及に向けた体制づくりができた。

#### (2) 指導・支援の体制

周年菊研究会の定例会には、市や JA、県など関係機関が一体となって、活動を支援し、プロジェクトの計画段階から実証結果まで情報を共有する体制とした。

### 3 普及活動の成果

#### (1) 課題及び目標の達成状況とその要因

一昨年、5月に新肥料の製品化が決定し、名前も「一発きくどん 有機入り」と決まった。8月から販売が始まり、半年で約7割の生産者に普及し、1,500袋が使われている。

産地研修会で新肥料の目的が理解されていたことと、土づくり研修会を行ったことで、新肥料の普及促進が図られた。

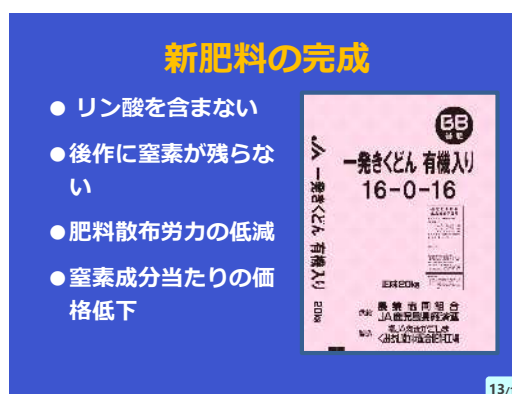
#### (2) 活動に対する生産者・農家の評価

プロジェクト活動成果が産地に受け入れられ、若手生産者の自信につながった。

また、新肥料の評価についても、使いやすく、生育も順調で評価が高い。研究会の成果についても、活用できるものはどんどん紹介してほしいとの要望も出ている。

#### (3) 地域農業振興への貢献

大塚団地のキク栽培は60年以上の歴史があり、生産者主体で産地を作ってきたことから、個人販売が中心で、自己完結型の経営であるが、産地として抱える課題は共通しており、その解決及び成果波及の体制ができた。



### 4 今後の普及活動に向けて

#### (1) 今後の課題

- ア 継続したプロジェクト活動支援による担い手の育成
- イ 新たな産地課題に対する解決方策支援
- ウ 関係機関との連携強化による支援体制の強化

#### (2) 今後の活用に向けて

- ア 研究会活動による担い手育成
- イ 産地への成果波及